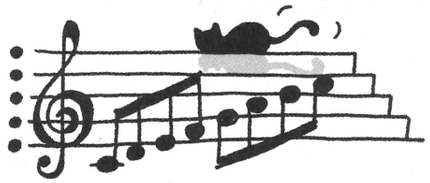


●特集●練習が楽しくなる！「音楽的」に弾くスケール

ロマン派のスケールを弾こう

極上のパールの輝きに魅せられて

岳本恭治●ピアニスト・音楽ジャーナリスト

一見無味乾燥に思われるスケール。しかしピアノの黄金時代であったロマン派の作品のなかには、粒がそろった極上のパールのネックレスのようなスケールがあふれかえっています。1連や2連のパール、大きなパール・小さなパールたちは、キラキラ輝いたり、渋く鈍い光を放ったりしながら、作品の魅力をさらに際立たせています。

どんなに趣向を凝らしたメロディでも、完璧な脱力と確実な重心移動による打鍵によって奏でられるこれらのスケールにかなうものはありません。

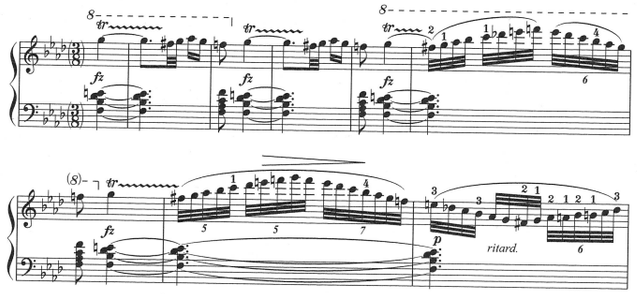
ここでは、譜例を使用してロマン派のスケールの魅力に迫ってみましょう。ぜひ、ピアノで弾きながらお読みください!!

シューベルト
F.Schubert (1797-1828)

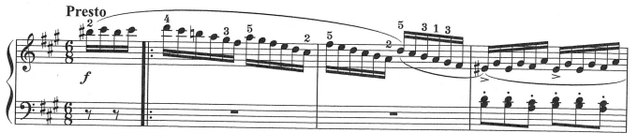
譜例1は、ウィーン風のカプリッチョ（気まぐれなほど場面がめまぐるしく変化する形式）、ハンガリー風のラプソディック（民俗的色彩を帯びた幻想的な形式）なスケールが登場します。1回目のスケールは、ヘ短調の和声的短音階の開始音が嬰ヘで、2回目も、やはり嬰ヘから旋律的短音階上行形で駆け上がり、そのまま変化せずに下行します。そして、さらに半音階へと進み、民族的な魅力を振りまいています。

とくにこの例では、トリルが先行していて、スケールの魅力を倍増させています。くれぐれもトリルでの緊張を緩めてからスケールに移行していくようにすることが大切です。

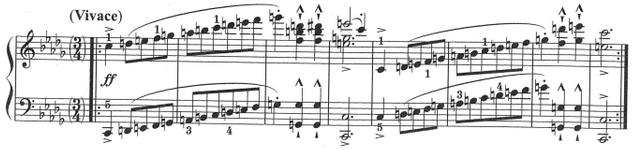
●譜例1　シューベルト:即興曲Op.142-4 ヘ短調　第36小節～
・エキゾチックに光るパール



●譜例2　メンデルスゾーン:幻想曲Op.28 嬰ヘ短調　第3楽章冒頭
・鋭い光を放つパール



●譜例3　ウェーバー:舞踏への勧誘Op.65　第209小節～
・大きめで明るい光を放つパール



たけもと・きょうじ●武蔵野音楽大学ピアノ科および国立音楽院ピアノ調律科卒業。ロンドン・トリニティカレッジグレード演奏家ディプロマを最優秀の成績で取得。演奏活動とともにピアノ構造学・改良史・奏法史の研究者として活躍し、講演、レクチャー・コンサートを国内外でおこなう。日本におけるJ.N.フンメルの研究の第一人者。2001年、スロヴァキア国際フンメル協会より「フンメル賞」を受賞。著書『ピアノを読む』（音楽之友社）、『江戸でピアノを』（未知谷）、共著『ピアノの秘密』（学研）など多数。現在、日本J.N.フンメル協会会長、国立音楽院講師、全日本ピアノ指導者協会（PTNA）正会員。公式ホームページ http://jnhummel.com

メンデルスゾーン
F.Mendelssohn-B (1809-47)

譜例2のスケールは、とてもスリリングです。短いスケールの連続で、左手にも同様のスケールが登場します。メンデルスゾーンが得意とした軽く空中を飛ぶように弾くテクニックが要求されます。決してガリガリと弾くようになってはいけませんね。

ウェーバー
C.M.v.Weber (1786-1826)

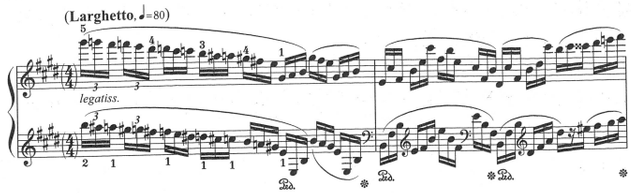
超有名な《舞踏への勧誘》に登場するスケール（**譜例3**）。ショパン先生が、もっとも難しいとおっしゃったハ長調のスケールです。単純な上行形が2回繰り返されるだけですが、前後の

ショパン
F.Chopin (1810-49)

へ短調の和音中心のメロディに挟まれ、舞踏会場のシャンデリアまで突き抜けるように、華麗に駆け上がります。

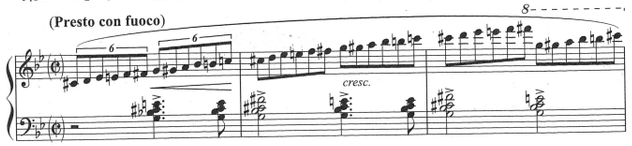
ショパン先生のレッスン室では、長い指（2・3・4指）が黒鍵を、両脇の短い指（1・5指）が白鍵を押さえるという、理想的なアーチ型の手のポジションが徹底的に教えられていました。そのポジションにもっともふさわ

●譜例4　ショパン:ピアノ協奏曲Op.11ホ短調　第2楽章第105小節～
・繊細でキラキラ輝く2連のパール

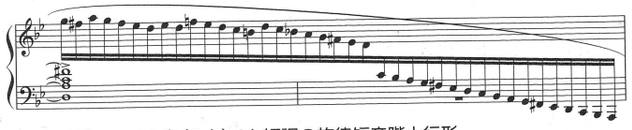


●譜例5　ショパン:バラード第1番Op.23ト短調
・ジュエリーボックスからあふれかえるパール

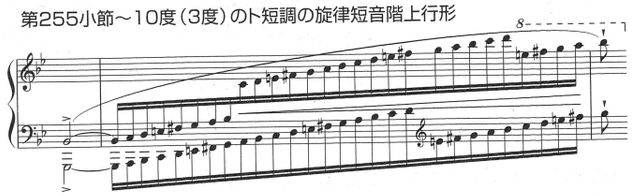
a　第243小節～半音階



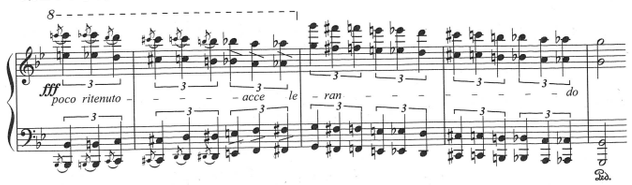
b　第248小節～ト短調の和声短音階



c　第255小節～10度（3度）のト短調の旋律短音階上行形



d　第259小節～二重オクターヴの半音階下行形

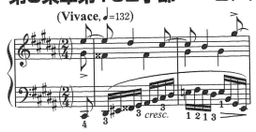


フンメルとショパンの微妙な関係

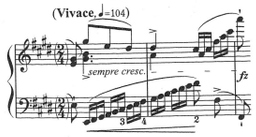
J.N.Hummel
(1778-1837)

フンメルは、モーツァルトの数少ない内弟子で、ショパンに大きな影響を与えた大ピアニスト・作曲家です。ウィーン奏法（軽快なタッチのピアノを使う）の大家で、後にイギリス奏法（重厚なタッチのピアノを使う）との融合を果たしました。①は、ショパンが②でお手本にしたスケール。右手の貴婦人の絵姿のようなメロディを、しっかりとやさしくサポートする左手のスケールは、「**控えめで、しっとり輝くパール**」のようです。③は、いかにも「ショパンチック」なスケールですが、実はフンメルが考案しました。「**ロマンの香りを振りまくパール**」と申せましょう。

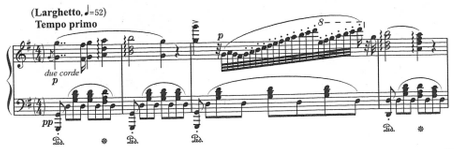
①フンメル:ピアノ協奏曲Op.89ロ短調
第3楽章第162小節～　ピアノパート



②ショパン:ピアノ協奏曲Op.11 ホ短調
第3楽章第472小節～　ピアノパート



③フンメル:ピアノ協奏曲Op.89ロ短調
第2楽章第74小節～　ピアノパート



しい調性は、ロ長調、変ニ長調、変ト長調となり、とりわけ右手はロ長調、左手は変ニ長調が理想とされました。したがって平面を弾くハ長調がもっとも難しいとされました。

これらの調性のスケールを、ショパン先生は、①メトロノームを使い正確なテンポで、とてもゆっくりと、②たっぷりとした豊かな音で（筆者注：決して力んだ*f*ではなく）練習させました。また、かなりの時間ノン・レガートで指の独立と重心の移動を練習した後にはじめてレガートで弾くことが許され、メトロノームの重りを、本人に気づかせないほど一つ一つ下げていき、テンポアップを図りました。その訓練の成果が発揮されるスケールをご紹介しましょう。

譜例4は、単純な6度の半音階です。しかしショパンは、この世のものとは思えないほど美麗な輝きを与えています。**譜例5**は超有名なバラードです。最終場面は、すべてスケールで構成されているといっても過言ではありません。何の奇もてらっていない、ハノンのような教則本に登場するスケールばかりです。しかしショパンの魔法にかかると輝きと典雅さを発揮し始めます。なお、ここでは取り上げませんでしたが、スケルツォ第1番、第4番や《木枯らしのエチュード》の最後にも魅力的なスケールがあります。

シューマン
R.Schumann (1810-56)

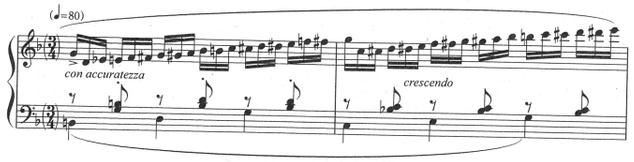
シューマンは、ショパンと違い、スケールをそのままの形で使うことはほとんどありませんでした。ピアノ曲のなかで長いスケールが登場するのは以下の3曲だけといっても過言ではありません。そのなかの2曲が、作品番号のついた作品として、最初の曲と最後の曲というのも興味深い事実です。

《アベッグ変奏曲》の第3変奏には、半音階がいくつか見受けられます（**譜例6**）。ヴィルトゥオーソ・ピアニストを目指していたシューマンらしい急速なスケールで、華麗に各部を牽引していきます。

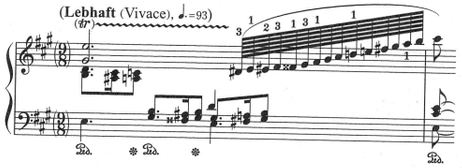
譜例7には、半音階とイ長調が連続した、シューマンにしては長いスケールが登場します。ショパンやリストの華麗なスケールとは違い、精神疾患も重く、まもなく精神病院に入らなければいけなくなる悲しい予兆を感じさせます。

譜例8は、オーケストラとピアノのための作品で、ピアノ曲としては最後の作品番号が付されています。生涯最後のピアノ曲にたった一度だけ華麗なスケールが登場するのも象徴的ですね。

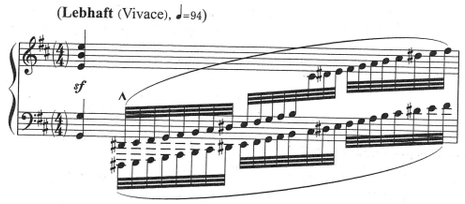
●譜例6　シューマン:アベッグ変奏曲Op.1　第3変奏第83小節～
・生き生きとした若い光のパール

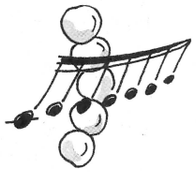


●譜例7　シューマン:暁の歌Op.133　第3曲第58小節～
・晩秋を思わせる光を放つパール

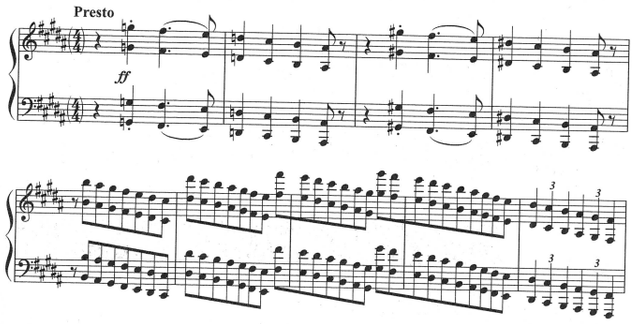


●譜例8　シューマン:序奏と協奏的アレグロOp.134　第212小節～　ピアノパート
・人生最後の花道を輝かせるパール





●譜例9　リスト:ソナタ　ロ短調　第1主題
・ゴージャスな光のパール



リスト
F.Liszt (1811-86)

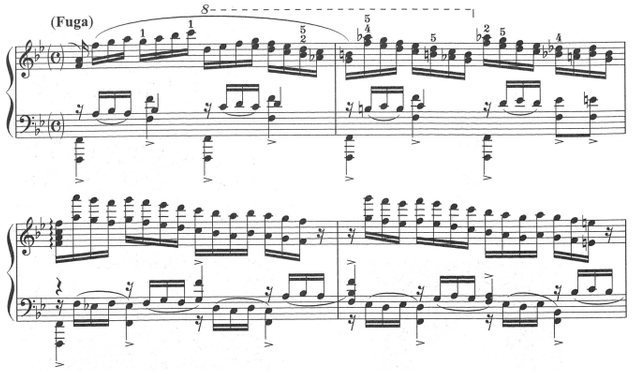
超絶技巧を駆使したリストの作品には華麗なスケールがあふれかえっていますが、極めつけは**譜例9**。スケールで構成された第1主題が、最後のクライマックスで、二重オクターヴになり、豪華絢爛なスケールに変身するさまは、ロマン派のスケールの魅力の一つとなっています。

ブラームス
J.Brahms (1833-97)

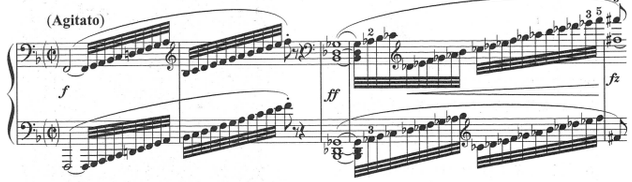
ロマン派のなかでもいぶし銀のような渋い存在のブラームスには、重厚なスケールが登場します。**譜例10**は、単音と3度、さらにオクターヴに変化するスケールが左右に現れ、最後のクライマックスを華麗に彩ります。**譜例11**は有名なラプソディのスケールです。単純なヘ長調と変ト長調の音階ですが、ブラームスの手にかかると重厚さと威厳が輝いています。♪

ピアニストであり、大作曲家でもあったこれらの先生方のスケールのほとんどが、レスナーの皆さん自身、または生徒さんたちが毎日格闘しているハノンやチェルニー、クラマーなどに登場するスケールとまったく同じです。いかにスケールの練習が大切か、おわかりになられたことと思います。これらの名曲の一部分をさらっていると思うとスケールも楽しくなり、いっそう充実した練習やレッスンになると思います。お互い頑張りましょう!!

●譜例10　ブラームス:ヘンデルの主題による変奏曲とフーガOp.24よりフーガ第334小節～
・渋い光のブラックパール



●譜例11　ブラームス:ラプソディOp.79 -1ロ短調　第62小節～
・重厚な輝きのパール

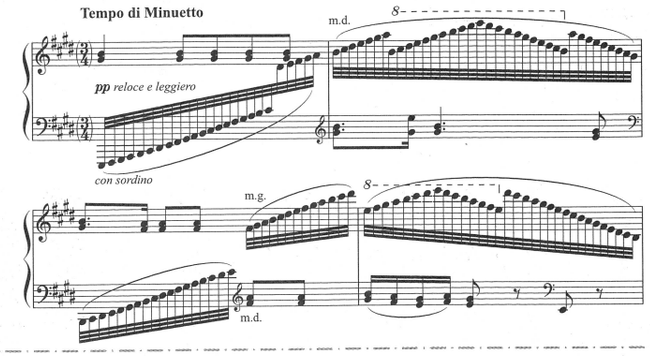


リストのライバル、タールベルク

S.Thalberg
(1812-71)

リストとの演奏試合で、「世界一のピアニスト」と称されたタールベルク（リストは「唯一のピアニスト」といわれた）。3本の手を持っているといわれ、両手の親指でメロディを奏で、残りの指が縦横無尽に駆け巡るアルペッジョ奏法が得意でした。下の譜例は有名なモーツァルトのオペラ《ドン・ジョバンニ》のメヌエットのメロディをはさみ、スケールが上下行する華麗なパッセージです。あくまでもメロディの邪魔をせずに、ホ長調のスケールそのもので飾ります。「**小さくても極上の粒ぞろいのパール**」といったところでしょうか。普段のスケール練習も、この部分をさらっていると思うと楽しくなりますね。

●タールベルク:《ドン・ジョバンニ》のセレナードとメヌエットによる大幻想曲　第198小節～



◆岳本恭治 インフォメーション
音楽教材研究会セミナー
「ピアノの構造と音の出し方～正しいタッチと脱力を学ぶ」
●11月13日（木）10:00～12:00　東京・巣鴨　東音ホール
問合せ:☎048・863・9145（湯本）